

新約聖書 マルコによる福音書 5章 21節—43節 (新共同訳)

²¹ イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。²² 会堂長の一人でヤイロという名の方が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、²³ しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」²⁴ そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけ行かれた。

大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫って来た。²⁵ さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。²⁶ 多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。²⁷ イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。²⁸ 「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。²⁹ すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。³⁰ イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。³¹ そこで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」³² しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。³³ 女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。³⁴ イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にからず、元気に暮らしなさい。」

³⁵ イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」³⁶ イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。³⁷ そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。³⁸ 一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、³⁹ 家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」⁴⁰ 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。⁴¹ そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。⁴² 少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。⁴³ イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物を少女に与えるようにと言われた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「手で触れ」

「神の言葉」すなわち「言葉」について、ボンヘッファーという牧師はこう記しています。

「しかし神は、その言葉をわたしたちの口の中に入れて下さった。わたしたちを通して、神はその言葉を語ろうとされる。もしわたしたちが神の言葉を妨げるなら、罪ある兄弟の血がわたしたちの上にふりかかる。もしわたしたちが、神の言葉を実行するなら、神は、わたしたちを通して、わたしたちの兄弟を救おうとされる」。

本日の福音書は、イエスの起こした二つの奇跡の話です。舟に乗って、イエスは再びガリラヤ湖の向こう岸に戻ります。おそらく、以前活動していたカファルナウムの地方に弟子たちと共に帰ったのでしょう。イエスの名が広く行き渡っていたカファルナウムの地で、イエスを待ちわびていた大勢の群衆が、湖のほとりにいるイエスのそばに集まってきました。

群衆の中でも、特にイエスの到来を待ち望んでいたのが、「会堂長の一人」であるヤイロでした。会堂長とは、ユダヤ教の礼拝施設である会堂（シナゴグ）を管理運営する最高責任者です。

この場面では、律法学者たちのイエスに対する反発がますます激しくなっていて、イエスが会堂で教えることは困難になっていたものと思われます。

会堂長であるヤイロは、イエスに批判的、対立的であったユダヤ教指導層に属する人物でした。しかしヤイロは、自分の立場を越えて、死にそうなる自分の幼い娘を助けて欲しいとイエスに救いを求めます。イエスが会堂での説教者として適切かどうかの選択をする権限を持つ会堂長が、イエスの足元にひれ伏し、懇願したのです。常識や習慣を越える危機がおとずれた時、人は、普段であればしないような行動を取るのです。

イエスは、ヤイロの切実な願いに応えるために、その場にいた大勢の群衆とヤイロと共に、すぐに娘のところへ向かいました。

ところが、ヤイロの家に向かう途中で、12年間長血をわずらっている女性に出会い、その女性を癒すための時間がひととき費やされました。

イエスの評判を聞いていたその女性は、イエスの衣に触れさえすれば癒やされるに違いないと思い、群衆に交じり、後ろの方からイエスの衣に触れました。すると、たちどころに彼女の不治の病は癒やされたのです。

イエスは彼女に、こう告げます。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさなさい」。

そんな最中、ヤイロの家から人々が来て、娘が死んでしまったことを告げ、「もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」と言いました。これは一見すると謙虚な言葉でもありますが、そこには憤りや諦め、さらには「これ以上、イエスを煩わせるのは時間の無駄である」という彼らの不信仰さが表されています。

彼らは、人間の基準によって神を計り、神によって可能となる事柄にあらかじめ制限を設ける人間の姿をあらわしているのです。

娘が死んだと知ったヤイロは、失意の底に突き落とされ、絶望的な気持ちになったでしょう。最後の唯一の頼みであったイエスによる救いも、とうとう間に合いませんでした。途中で長血の女性を癒すために時間が割かれ、イエスの到来が遅れたことが悔やまれたかもしれません。

しかし、イエスはヤイロに「恐れることはない。ただ信じなさい」と告げます。イエスがしばしば使う「恐れることはない」という言葉には、「神がここに臨（のぞ）み、働かれる」という意味合いがあります。幼い娘が死んだというこの嘆き悲しみの場においても、神はその場に臨み、働きかけてくださる。それを「ただ信じなさい」と言うのです。

娘が死んでしまったと泣き悲しむ人々に、イエスは言います。「子供は死んだのではない。眠っているのだ」。それは、イエスにとって死は終わりではなく、新たな、より大きな命に向けての眠りだということなのかもしれません。しかし人々はイエスの言葉を理解せず、イエスをあざ笑います。

イエスは子供の手を取って、「タリタ、クム」と言いました。「タリタ、クム」はアラム語で「少女よ、起きよ」という意味です。

新約聖書は、1世紀の地中海周辺地域の共通語であったギリシア語で書かれていましたが、ここではイエスが話したアラム語がそのまま残されていて、その言葉の響きそのものが力を宿しています。

言葉には「物事を説明する」という働きがあります。さらに言葉には「相手に働きかけ、相手を導く」根源的な力があります。神が言葉によってこの世界を創造した、創世記1章3節の「光あれ」という言葉のように、イエスの言葉は、死んでしまった少女の耳に届き、響いたのでしょう。

「タリタ、クム」。

少女は起き上がって歩き出しました。イエスの呼びかけはいのちへの導きです。イエスの呼びかけによって、少女は生きる力を引き出されたのです。

本日の福音書は、イエスの起こした二つの奇跡の話でしたが、この二つの奇跡には対照的な要素があります。

長血を患っていた女性からは、自ら必死でイエスを求め、イエスにすぎた能動的姿勢が感じられ、生き返った少女からは、特に自分の強い思いや意志をもって何かをしたわけではない、幼い子供ならではの受動的姿勢が感じられます。

12年間長血を患っていた女性の病気が治ると、死んだ少女が生き返ることでは、奇跡の度合いとしては、死んだ少女が生き返ることの方が上のように思えるでしょう。

ですが、心が深く癒やされ、すべての苦しみから解放されるような根源的な救いを感じさせられるのは、この長血を患っていた女性の病が治った奇跡の方ではないでしょうか。

この時、女性は、身体が治癒したというだけではなく、同時に深く心が癒やされたこと、その女性の深い心の癒し、苦しみからの解放が、2000年の時を越えた今でも、生きてそこに臨在しているかのように鮮明に伝わってくるのです。

この女性が患っていた病が女性特有の病気だったということにも、意味があると思います。

ここでは「人間の心が癒やされた」と言うよりも、「女性の心が癒やされた」という方が相応しいのではないのでしょうか。

そして、イエスと女性との間になされた心と魂のホットな交流、イエスが彼女に注いだ慈しみ深い愛は、主イエス・キリストが同時に私たちに与え続けてくださっているものでもあるのです。

イエスは、死んだ少女にこう語りかけました。

「わたしはあなたに言う。起きなさい」。

これは、私たちへの「魂の目覚め」を促す言葉でもあるのではないのでしょうか。

私たちはどんな時も、主を愛し、主に感謝し、主を賛美しながら、共に歩んで行きましょう。

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 哀歌 3 章 22 節—33 節（新共同訳）

²² 主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。²³ それは朝ごとに新たになる。「あなたの真実はそれほど深い。²⁴ 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い／わたしは主を待ち望む。²⁵ 主に望みをおき尋ね求める魂に／主は幸いをお与えになる。²⁶ 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。²⁷ 若いときに軛を負った人は、幸いを得る。

²⁸ 軛を負わされたなら／黙して、独り座っているがよい。²⁹ 塵に口をつけよ、望みが見いだせるかもしれない。³⁰ 打つ者に頬を向けよ／十分に懲らしめを味わえ。

³¹ 主は、決して／あなたをいつまでも捨て置かれはしない。³² 主の慈しみは深く／懲らしめても、また憐れんでくださる。³³ 人の子らを苦しめ悩ますことがあっても／それが御心なのではない。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 8 章 7 節—15 節（新共同訳）

⁷ あなたがたは信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、わたしたちから受ける愛など、すべての点で豊かなのですから、この慈善の業においても豊かな者となりなさい。

⁸ わたしは命令としてこう言っているのではありません。他の人々の熱心に照らしてあなたがたの愛の純粋さを確かめようとして言うのです。⁹ あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。¹⁰ この件についてわたしの意見を述べておきます。それがあなたがたの益になるからです。あなたがたは、このことを去年から他に先がけて実行したばかりでなく、実行したいと願ってもしました。¹¹ だから、今それをやり遂げなさい。進んで実行しようと思ったとおりに、自分が持っているものでやり遂げることです。¹² 進んで行く気持があれば、持たないものではなく、持っているものにに応じて、神に受け入れられるのです。¹³ 他の人々には楽をさせて、あなたがたに苦勞をかけるということではなく、釣り合いがとれるようにするわけです。¹⁴ あなたがたの現在のゆとりが彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。

¹⁵ 「多く集めた者も、余ることはなく、／わずかしか集めなかった者も、／不足することはなかった」と書いてあるとおりで。

教会讃美歌 292 番「重荷をにないて」1,2,3 節、181 番「ここにいます」1,2,3 節、239 番「ひととなりたる」1,2,4 節、320 番「しあわせなことよ」1,2,4 節。